

親
鼓
未

通油町

萬屋板





昔々
日陰山

の兎、

婆の敵

兎様子を
聞き驚く。

狸を殺

せし事、兎のお手柄とて

世にかくれなし。此狸の子成人して親の敵

を討たんと思ひ立ちけれども敵を

討ちに出て獵人に撃たれん事を恐れ、

種ヶ島村

の宇津兵衛といふ獵人

を抱込み、我身を

全くして敵を討つ力

にもせばやと

此所に來り頼む。

「随分力になり

申さん、兎角

氣長に尋ね給へ。

たぬきは

損氣ぢや。」

明日は化仲間の會合

なれば、狐、狸、貉など

此山蔭に集まる筈なり。

此ところへ伴ひ、金儲

させ申さん、其代りに

敵討の力となり下されよ。」

親敵打腹鼓



所の獵人も
これを知らず、

宇津兵衛は
今日狸の導きにて

此所へ來り
隙を見すまし

老いたる狐三疋
撃ちとりけるが、

白狐をば撃ち洩しけり。

「呑みかけく

白狐の

このく

玄關前、

さあく皆も歌へく。」

「此お神酒は
四方のあかと
飲めます。」



「鯛の
味噌吸とは
油鼠の
事だ。」

かくて鬼は狸に狙は
江戸へ来り、先づ
浅草の観音へ参詣

して、身の安全を
祈りける。はじめ
階を上る時、頼む

ぞ観音々々として
上りける故、

観世音も信心の程を感じ給ひ、いづく
迄も命を救はんと思召しけるが、

下向の時尻喰へ
観音々々として階をおりける故、

観音も腹を立ち

給ひ、鬼
が願望を
ば茶にな

されける。

る、と聞き、日陰山を逃れ出で



「命を救ひ
たび
給へ。」

かの爺婆が中に一人の男子ありしが、
大放蕩者ゆゑ勸當受け、
江戸へ出でぶらつき、

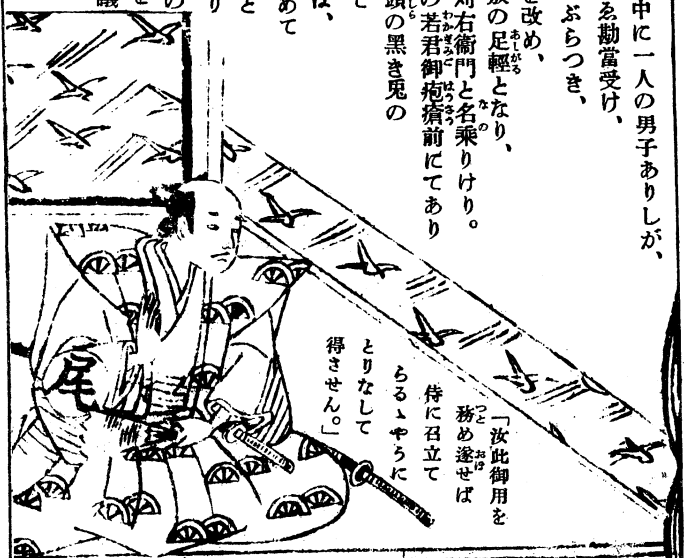
近年人柄を改め、
さるお屋敷の足輕となり、
則ち蘆野町右衛門と名乗りけり。
この屋敷の若君御抱瘡前にてあり
けるが、頭の黒き鬼の

生膽を豫て
用ひ給へば、
御抱瘡極めて

輕からんと
申す者あり

し故、頭の
黒き鬼を
御詮議

あり
ける。



「汝此御用を
務め遂せば
侍に召立て
らるゝやうに
とりなして
得せん。」



物頭
先尾勘解由

わたくし
在所に
頭の黒き
鬼あり。
其生膽を
取りて
差上げ
申さん。

親敵打腹鼓

刈右衛門鬼の御用承り在所へ歸り
勘當の詫事かなひて親團子兵衛に對面し、

母の最期の様子、鬼の蔭にて
敵をとりしことを聞きければ、

かの鬼はわがために

大恩あるものなれば、

生膽のこと大きに

心當違ひ、

當惑し

又江戸へ

立歸り

神力を

頼まん

と思ひ

定め

けり。

近所の者
取持して
勘當を免させ
同道して来る。

「御機嫌の
拜を
これ程喜ばし
儀はござり
ませぬ。」





狸人、
獵人、

中田屋

おめい
おめい
おめい

おめい
おめい

狸

へ
つけ
こみ
鰻舟の
中を
探さんといへば、
亭主舟の上へ飛上り、
天川屋もどきにて
力みけれども、胸元へ
刀を差付け責める。

女房お花、蔭にて鰻を
焼きければ、狸、獵人
此句に氣を奪はれて
眠を催しける時、
獵人の袂もひかば
などか切れざらん



八疊の

翠丸も

飛ば

などか

越え

ざらん

と

歌ひければ
享主悟りて

飛びのく。

「獨人浮かそ、
根元蒲焼、
こんちきち。」

宇津兵衛は

山家の賤の女ばかり

見し者ゆゑ、

お花が顔の白きと、

歌の聲と、

蒲焼の匂と、

狸の狂ふとに見とれ、

同じやうに

浮かれる。



近所の事故
人買とぞ
見えける。

狸、蒲焼の匂を始めてきゝければ
焼鼠も及ばぬ匂なる故、心亂れ
狂ふ。



お内儀の蒲焼に
性根を奪はれ
兎の敵討は

わきに

なり

ける。



右衛門は
他に
頭の黒き
鬼を

授け

給へと

秋葉へ
祈誓を

込めん

と

此所へ

來り

しに、

狸、親の敵の鬼を出せと

争ふを聞けば、わが大恩ある鬼ゆゑ

命を助けんと

さまぐにいひつゐる。



「いらぬそなたの
庇ひ立て
そのいで
通されよ。」

「そちに討たせて
よければ、

主人のため

生贄をほしき

鬼なれども、

それさへせぬは、

よく義理ある

事と思へ。」

刃右衛門

狸と

争ふを

きゝて

兎、鰻舟より飛出で、

鰻裂の庖丁にて切腹する。

中
四
郎

「きりく

生膽を

とりて、

からだを

こちへ

お渡し

あれ。」



「刃右衛門様の

われを圍ひ給ふも、

狸殿のわれを

討たんとあるも、

皆孝の道の

義理づく、

とても

逃れぬ

此場の仕誼

はや／＼生膽を

とり給へ、

その上は狸殿存分に

親の敵を討ち給へ。」

「その深手にては

助かるまじ。

不慙ながら

生膽をとりて

忠義をたてん。」



兎、膽を抜かれ
氣も絶々と

なる所を、

狸引出して

親の敵思ひ知れと

胴切にしければ、

上の方は黒き鳥と變じ

下の方は白き鳥となり

飛び行きけり。

うさを二つに切りて

出来たる鳥なれば

黒きを鶴と名づけ、

白きを鶩と名づけしも

この時よりの

ことなりけり。

「扱討ちばえのせぬ敵

ぢや。」

「毛を吹いて
傷を癒した。」

「割の合はぬ
ものぢや」

「ふみならぬにへは替生命つずなの使に役二と命

「一つの生敵討と命

親敵打腹鼓

此程白狐會合の節
狸の導きにて宇津兵衛

に老狐三疋を撃た

せし事こんくわい

先に立たず、かれ等

が敵の獵人並に

導きたる狸を

討たんと、偽の

謀を以て先づ

彼の狸を抱込み

懇にたのむ。



獵人に
撃たれ

し狐の

子供

敵を

討ち

たき由

を願ふ。

「汝が恩ある宇津兵衛なれども

たばかりて此子狐共に

討たせなば、汝を狸の金比羅

に祭りて得せん。

その金は

當座の褒美

なるぞ。」

「敵を討ちし祝儀に

事寄せ

宇津兵衛を

我穴の内に

招ぎよせ申さん。

方々は豫て

我穴の内に

忍び居給へ。

例の幸丸を

うちかくるを

合圖に、

いづれも仇を

報い給へ」と

しめし合せけり。



「委細

かしこまり

ました」

狸は、木の葉を

小判なりと思ひ喜ぶ。

同じ化仲間にて

油断のならぬ世の中なり。



狸、宇津兵衛を

穴の内へ招き、

彼の木の葉を

金と心得

引出物に

出しければ

獵人大きに

腹を立ち、

人にこそよれ

我を化かさんとは

一おらが親方白狐殿の謀見たか。

よくも、おのれ、獵人を導きして

おらが親爺をうたせたな。

今その態を見るからに

面白狸のあなうれしや、

今こそ

思ひ知れ。

これ、翠丸ぐるみ
つかれてはおたまりは
ない。

けちいま

しい。

太印なりといひけれども、
狸は却つて木の葉とは知らず

争ひしが、

その金子が嫌なら

この金子を與へんと

狸丸を擴げ打ちかけゝる時、

三疋の

子狐

飛出で

寧丸の

上より

獵人を

突き

とぼす。

「親の敵
覺えたか。」

「いつぞは

うぐい〜と

思ひ儲けし

こんく

今日。」

「たばかられたか
無念な。」

隣穴の狸

客の取持に來り、

此態を見て

逃げ行く。

親敵打腹鉞

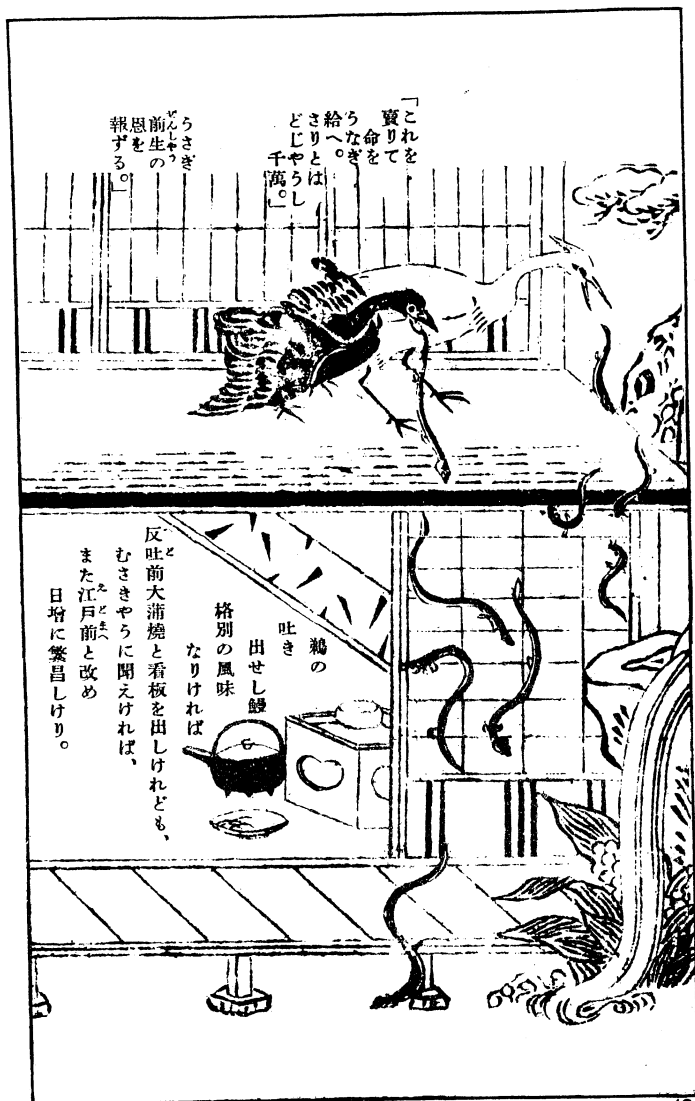
大いにてりして
 鰻泥鰯^{うなぎ}大切物なれば
 中田屋も
 客がなさに商賣止り、
 大きに難儀し、
 妻のお花三兩の金につまり手水鉢^{てみづはち}に向ひ
 ほまち無間^{むげん}を
 つきしに、
 不思議や、
 鵜^うと鷺^{さぎ}
 と來り
 三兩は
 との鰻
 泥鰯^{どじょう}を
 はらりと
 くくと
 吐き
 出す。

こゝに三升
 かしこに
 泥鰯^{どじょう}。

新なる吸物
 とうとう出るお
 うなぎやうなぎ

これは
 夢かや、
 うさきかや。





「これを
賣りて
命を
うなぎ
給へ。」
さりと
どじやうし
千萬。」

うさぎ
前生の
恩を
報ずる。」

鵜の
吐き
出せし鰻
格別の風味
なりければ
反吐前大蒲焼と看板を出しけれども、
むさきやうに聞えければ、
また江戸前と改め
日増に繁昌しけり。

かくて
かる右衛門

生贍を
差上げければ

侍にとりたてられ、
芦野重右衛門と改め

重く用ゐられ、

在所の

親爺をも引取り

樂々と育み、

其身も

立身

して

官榮え

けり。

喜三次

戯作

吉



「長生をすれば又
このやうな

目出度い春にも
會ひ申す。」

會ひ申す。」

「千代萬代も
お榮えを

願ひ奉り
ます。」

徳川春田画